生・労働・運動　　アンラーニングプロジェクト　　2008.1

ニューズレター

生・労働・運動net　jammers
富山市神通町3-5-3
TEL 076-441-7843
FAX 076-444-6093

「アンラーニングプロジェクト　07　第Ⅱ期」

――「＜背後＞の未来が現在と出会うとき――浦島太郎物語」での論議から

12月2日、「アンラーニングプロジェクト　第Ⅱ期」では、「アンラーニングプロジェクト」を主催している「生・労働・運動net　jammers」のメンバーである埴野謙二さんを話し手に迎えて、学習会を行いました。

今回の学習会では、広い意味での社会運動に関わるようになってから、富山に来る60年代末の時期までの埴野謙二さんの「個人史」を、同「時代」史と重ねあわせながら、３時間余りにわたって語ってもらいましたが、このニュースレターは、その話の中でとりわけ重要だと思うことをまとめたものです。

埴野謙二さんの話から

□　「背後の未来」としての〈68年〉

誤解はないとは思いますが、私は昔話をしたいわけでも、「武勇伝」を語りたいわけでもありません。今回の私の話のねらいとしては、「アンラーニング

プロジェクト」の学習会の中で渋谷望さんや小倉利丸さんが話してくれたような、ようやくこの国でも登場してきた全世界的な反ネオリベラリズム／グローバリゼーションのうねりに連なるような動きを、日本の社会運動の流れといった長いスパンの中に据え直してみたいということがあります。

まず最初に、「『背後の未来』が現在と出会うとき」という今回の私の話のタイトルについて、話したいと思います。「背後の未来」というのは、もちろん私が作った言葉ではなく、ハンナ・アーレントという、深い洞察に満ちた政治についての考察を繰り広げた政治哲学者が使った言葉だそうですが、その言葉がどこで使われているのか私は正確には知りません。それではその言葉をどこから取ってきたのかということですが、イタリアにパオロ・ヴィルノという人がいて、「君は反革命を覚えているか」という文章の中で「背後の未来」という言葉を使っているので、それをそのまま使わせてもらいました。この「反革命」という言葉をヴィルノがどのように使っているかが大事なことなので、そのことについてちょっとふれたいと思います。

国家や既成の社会の秩序の転覆・破壊をねらうような革命運動に対して、それを国家権力の側が暴力的に圧し潰したりするような動きのことを、普通、「反革命」と言うわけです。そのような意味に加えて、ヴィルノが言っている「反革命」というのは、「反転された革命」ということなのです。つまり、革命や社会運動の側の力を逆手に取って、運動の側が問いかけている問いやそれに対する答えを国家や資本の側が取り込み、流用することで、秩序の維持や支配のために使っていくことを、ヴィルノは「反転された革命」という意味で「反革命」と言っているわけです。1968年をピークとする世界各地のいろいろな動きが最後の輝きを放ったのが、小倉さんの話の中にも言及されていたイタリアでの1977年の「アウトノミア」運動の展開であるわけですが、ヴィルノが言う「反革命」というのは、1980年代のイタリアや、この間の日本などで、そのような運動のもっていたパワーを支配の側が「盗用」してネオリベラリズムが展開されていくような状況を具体的に指してます。

最近、1968年という年にカッコをつけて、〈68年〉という言い方がされることが多いのですが、1968年というのは、ベトナム戦争に反対する反戦運動が全世界で同時代的に展開され、同時に、学生を中心とする若者の反乱がまるで申

し合わせたかのように一挙に噴出した年です。日本に即して言うと、普通は1960年代の半ばから70年代の始めまでの数年間の時期を〈68年〉という呼び方で言っていますが、日本でも、ベトナム反戦運動や大学を中心とする学生の叛乱といったものが活発に繰り広げられたわけです。当時の高揚した気分や、世の中が激動しているといった雰囲気を、今、伝えようとすることはなかなか難しいのですが、そのように、かつて無いほど世界中が同時発生的に大きく揺れている時期でした。

もう一度まとめて言いますと、〈68年〉というものが持っている潜在的な可能性がまだ全面的には汲み尽くされていないという意味で、ヴィルノは「背後の未来」という言葉を使おうとしているというように理解してもらえればと思います。現実的には国家権力の暴力的な弾圧によってどの国でもそれは圧し潰されていくわけですけれども、〈68年〉というものが持っていた可能性というのは完全には汲み尽くされていないし、まだ潜在的に大きな可能性を孕んだものとしてあるということを言いたくて、私も今回の話のタイトルに「背後の未来」という言葉を使ったわけです。

それでは、「『背後の未来』が現在と出会う」ということはどういうことなのかといえば、〈68年〉をピークとする社会運動の大きな流れは、国家権力によって暴力的に圧しつぶされ、その一方でヴィルノの言う「反革命」を通して秩序の側に盗み取られて流用されていくのですが、それでも歴史の中の伏流水のようにその後もその流れは途絶えることなく流れています。日本の場合には残念ながらまだそこまでいっていないのですが、まさに今この時代に、ネオリベラリズム／グローバリゼーションに対抗するような運動が、現在、世界の各地で激しく展開されています。そのように、歴史の伏流水のような形を取りながらも、現在まで〈68年〉というものが流れてきているのだと私は思っていますので、「『背後の未来』が現在と出会っている」という言い方をしているわけです。

そのような象徴としての〈68年〉からの「帰還者」、または一人の「浦島太郎」として話したいというのが、今回の私の話の大きなモチーフとしてあります。

□　〈68年〉が解体させた「社会運動の古典的範型」とは

今回の話のためにお手元にあるような年表を作ってみましたが、この年表について少しだけ説明しておきたいと思います。年表の上の半分は、私の「個人史」ということになりますが、振り返ってみて、西暦で言うと最後に「6」がつく年が、どうも私の生きる上での大きな節目にあたる年のようです。私が生まれたのは36年で、46年は日本国憲法が公布された年ですがこれはどうでもいい。また、56年は、私がその後同伴者となった者と出会った年です。66年というのは私が就職して高知へ行った年ですが、そこである人物に出会ったことが、私が生涯このような道をたどる上での大きな契機であったと思います。76年というのは後でまた説明しますが、残念ながら〈68年〉をピークとする大学での学生の叛乱が終息し、これからどうしようかと思いながら、言わば私個人としての「大学闘争」はこれで終わりにしようと思った年です。その後の86年という年は、地域でいろんな運動をするためにも、自分なりにある種の「集団」を作っていこうとする大きな契機になった年です。それから96年は同伴者が亡くなった年です。その後10年経った2006年というのは去年のことですけれど、私がもう一度何とかがんばらなくてはと思い始めた年です。

年表の一番下の「日本における社会運動問題史にそくして」というのは、私の人生での半世紀の時間の流れを、日本における社会運動の歴史や問題史としてもう一度捉えなおしてみようとした部分です。

年表の真ん中の部分に、「『同時代』史から同『時代』史へ　そして再び『同時代』史へ」という見出しをつけましたが、私にとって同時代史というのは二つあります。同じ時代に生きて、一緒に時代をつくってきたとか、自分も少しはそれに参加したということを思える時代、つまり「個人史」の日付と社会運動の流れの中での日付とが対応するような時代を表すのが、時代にカッコをつけた同「時代」史という言い方です。もう一つの「同時代」史というのは、これはただその時代に生きていたというだけで、別に社会運動の流れの中での日付と対応する「個人史」の日付があるというわけではない時の言い方です。

ところで、年表の下の「日本における社会運動問題史にそくして」の部分の一番初めのところに「社会運動の古典的範型」と書きました。〈68年〉という

ものが日本の社会運動の流れの中でどのような意味で大きなターニング・ポイントであるのかを知ってもらうためにも、それまでの運動の古典的な「範型」とはどのようなものであったかについて、少し説明が必要ではないかと思います。その根底にあった理論は、言うまでもなく古典的なマルクス・レーニン主義に基づく革命運動論や革命組織論です。それに即して言いますと、例えば、マルクス・レーニン主義で武装した一握りの指導部があるわけですが、これは前衛党ですから、二つあったらどっちがより前衛かということになるわけで、一つの国には必ず一つの共産党のような前衛党しかないということになっています。その共産党の指導部がその社会のすべての社会運動を指導するという立場にあり、とりわけ、経済的利害を軸に組織された労働者を階級的に自覚させるという使命を、共産党の指導部が担うということになっています。

ですから、「労働者本隊論」とも言いますが、前衛党によって率いられる革命勢力の「本隊」は基本的には労働者階級であり、その他の社会運動は、言わば「枝葉」なわけですので、基本的には労働者の階級闘争に従属した位置しか与えられていません。例えば、女性解放運動は必要だけれども、それは革命が実現すれば解決するんだと、大まじめに考えられていました。いろんな差別の問題も、そういうことは放っておけというわけではないのですが、革命運動が成功すればそんなことは自ずから解けていくと、本当にその当時は思われていたのです。

ただ、その革命がどういう種類の革命であるかということについては、どの社会もみな同じではないのですから、例えば、まだまだ近代以前の封建的遺制が残っているような社会での革命は、「民主主義革命」というのが中心になり、ある程度近代化や工業化が進んだ社会で、基幹産業部門の労働者の勢力がある程度は存在する社会での革命は、「社会主義革命」であるといったように、革命の性格とか種類というのは、指導部が世界情勢を見ながら判断することになります。しかも各国に一つずつ前衛党があるといっても、それらがばらばらにあるわけではなく、ロシア革命以後はコミンテルンと呼ぶこともありますが、世界中の共産党や前衛党がソビエト共産党を頂点とするピラミッド状に構成されていました。

だいたいこれが1950年代の半ば頃までの運動状況で、そういう古典的な「範

型」がずっと全世界的に続いていたわけです。私がそういうことに目覚めたのは1950年代の半ば頃ですが、それ以後というのはそういったマルクス・レーニン主義的な運動の「範型」が徐々に崩れていくことが始まる時代なのです。後でまたお話ししますが、そういった「範型」を最終的に社会運動の主流から追いやったのが、〈68年〉だと言ってもいいでしょう。

□　同「時代」史としての〈68年〉を語る

共産党から自立した学生運動の登場とその限界

少し気恥ずかしい言い方ですが、私や私の次の世代ぐらいまでは「戦後青春の範型」とでも呼ぶようなものがあって、若者が自分が生まれ育った家や親への違和感や疑問から、社会への批判意識を懐くようになり、先程言ったような古典的な運動の「範型」に関わっていくという道筋が、共通の経験としてあったように思います。

私が大学に入ったのが1955年ですが、「経済白書」が「もはや戦後ではない」と言ったのがこの年のことであり、また、保守党と左右の社会党がそれぞれ一本化されて与党の自民党と最大野党の社会党で国会の多数を占めるという、いわゆる「55年体制」が成立したのもこの年のことです。また、社会運動ということで言えば、この55年は、いわゆる「六全協」で、共産党が「民族独立行動隊」や「山村工作隊」によるそれまでの武装闘争路線を完全に放棄して、人々に「愛される共産党」へと転換しようとした年でもあります。

当時はいわゆる「ポツダム自治会」で、大学生であれば自動的に大学自治会に加入することになるので私もそこに入っていましたが、そこでの自治会の活動は、「トイレットペーパーをきちんとそなえろ」とか「学生食堂のメニューを改善しろ」といった「日常生活要求運動」や、ロシア民謡やフォークダンスといった「歌とおどり」が中心でした。私は、そうした傾向に対して、思想的に受け入れられないという以前に、なにせ、歌とかおどりとかいったことが苦手だったもので、肌にあわないという思いを強くしていました。

そうした共産党の中央部の方向転換とは対照的に、50年代後半からは、「砂川闘争」といった反基地闘争が活発化し、そうした反基地闘争に学生も支援と

して加わることをきっかけに学生運動も勢いを盛り返し、58年には、それまでの共産党よりの学生組織とは別に、「共産主義者同盟（ブント）」が結成されました。

56年に、当時のソ連共産党書記局長のフルシチョフによる「スターリン批判」がありましたが、日本でも、それまでの共産党を中心とする運動の中でその名前をあげることもタブー視されていたレオン・トロツキー（彼はスターリンとの権力闘争に敗れて亡命先のメキシコで暗殺されたのですが）の思想を復権させようという動きがありました。そうした動きの中から50年代の後半に「トロツキスト同盟」が結成され、そこから更に「革命的共産主義者同盟全国委員会派」が形成されて、「ブント」と共に後の学生運動の一翼を担う政治党派・組織の母胎となりました。

東京では戦前から都内のいくつかの大学の学生が貧しい人たちの中に入って社会奉仕を行う「セツルメント活動」というものがあり、中には医療活動も行うようなグループもありました。「セツルメント活動」というほどのものではないのですが、私個人の活動としては、「子供会」に参加して、貧困層の人たちが住む地域に入り、子どもたちに勉強を教えるといったことをしていました。当時はまだ印刷工場でもたくさん手作業の部分が残っていましたが、そうした作業を行う労働者たちが住んでいた長屋横町が文京区にあって、そこでの「子供会」の活動を通じて、後につれあいとなった者との出会いがありました。

50年代末から60年にかけて大きな高揚を迎えたのが日米安保条約の改定をめぐる「安保闘争」でしたが、闘争の盛り上がりの中で、59年11月に、当時の「全学連」の学生たちが「我々の国会だ」と気勢を上げながら、国会に「乱入する」ということがありました。私たちは「お焼香デモ」だといって批判していましたが、当時の総評・社会党ブロックや共産党といったいわゆる「革新勢力」によるデモは、「革新」議員が詰めている国会前の「請願所」までアピールに行っては引き返してくるといったスタイルだったのに対して、「全学連」の学生たちは、街頭で警官隊との衝突を怖れずに激しいジグザグデモを行っていました。

そのように、当時の「全学連」は共産党と対決しながら、後の新左翼の先駆となるような戦闘性を発揮する一方で、政治的な経験の不足から来る限界性を

免れていませんでした。もう少し後の時代であれば、せっかく国会に突入したのですから、そこを占拠して国会議員たちを一室に押し込めて、面と向き合って問いつめるというようなことをしたと思うのですが、当時の「全学連」の学生たちは、その時の社会党の委員長だった浅沼稲次郎のあいさつを受けた後、そのまま引き揚げてしまいました。結局、当時の岸内閣の強行採決により、新安保条約は成立させられてしまったのですが、マスコミの論調も、強行採決ではない民主主義に則った国会審議を訴える一方で、学生たちの「暴力」的な言動を戒めるといったものに集約されて行きました。

当時はまだ「革新勢力」といわれるものの力が強くて、労組などが動員をかければ多くの人たちを集めることが可能な時代でしたので、学生たちの行動力や戦闘性が違う形で発揮されれば、もっと激しく大きな運動として展開される可能性もまったくなかったわけではないと思いますが、「安保闘争」は結局、「壮大なゼロ」として終わってしまいました。

高知時代の運動経験から

教育の力で社会を変えることができるのではないかという幻想を抱いて教育学部に入学して、研究者の道に進むことには抵抗がなかったのですが、私が在籍していた教育学部というところは共産党のシンパが多く、そこでのアカデミズムのあり方には違和感を抱くようになっていきました。それは一つには、大学院に入ると学生の頃よりも大学の教官との距離が縮まって、その分、口では立派な理念を語る教官たちの人間として嫌な面が見えてきたということもあります。また、共産党の「対米従属論」に基づき、共産党よりの「革新」的な教育学者たちが、日本が「自立」するためにも国民形成が教育の大きな課題だとする「国民教育論」を唱えていたことにも、大きな違和感を感じていました。

そのような事情で、いつまでも東京の大学にはいたくないなと考えていたところに、66年に高知大学の教員としての就職の話があり、高知に行くことになりました。就職のために、初めて高知に行った時には、東京から文字通り1日がかりで、「ずいぶん遠いところに来てしまった」とつくづく思いましたが、先ほども言いましたが、その高知でのある人物との出会いが、その後の私の生

き方に大きな影響を与えることになりました。その人は四国山脈のふもとにある山村の出身で、彼の兄弟たちは皆、中学校を卒業した後、就職しているのですが、彼だけは高校に行かせてもらい、高校卒業後いったんは就職したのですが、どうしても勉強がしたいということで大学に入ってきたのです。

彼は生涯定職に就くということのないまま、生を終えましたが、自分が生まれ育った場所との関係に、ずっとこだわり続けてきた人で、自分はそこから「逃亡」してきた者なのか、それとも「追放」された者なのか、あるいは「脱出」してきた者なのかというような問いをずっと抱き続け、それを「変革」の思想の原点にすえようとし続けた人です。その人と出会ったことで、私としては、もう大学のアカデミズムのようなものはどうでもいいと思えるようになりましたし、その人と一緒に高知で何かできないかと考えるようになりました。

これは後になって知ったことなのですが、フルシチョフによる「スターリン批判」が行われた56年に、カストロやゲバラたち総勢わずか９人の革命家たちがグランマ号という小さな船で亡命先のメキシコから故国キューバに戻り、その３年後に親米・独裁的なバチスタ政権を打倒して、キューバ革命を成功させました。ゲバラはその後、カストロ革命政権の閣僚のポストを捨てて、ゲリラ活動を行うのですが、その中で「三大陸人民機構」に向けて発せられた「２つ、３つ、更に複数のベトナムを！」というメッセージがあって、それは当時、とても感動的なものでした。

また、私が高知にいたころに、強い印象を受けた出来事としては、67年10月の「佐藤訪ベト阻止闘争」があります。この時初めて、学生たちが「ヘルメットと角材 」というスタイルで街頭闘争を闘ったことは、ゲバラのメッセージに次ぐような鮮烈な印象を受けました。

「安保闘争」でも60年6月15日に東大の学生の樺美智子さんが国会の南大門で警官隊によって圧死されるということがありましたが、この「佐藤訪ベト阻止闘争」でも山崎君という学生が警察の警備車によって轢死させられました。また、ほぼ彼の死の少し後で、エスペランティストの由比忠之進さんが、アメリカによるベトナムへの軍事侵略に抗議するために焼身自殺するということがありました。

そういったことに衝撃を受けながら、周囲の学生たちと一緒に研究会を行っ

ていましたが、その中で政治「死」から貧困による窮乏死まで含めて、「人が街頭で死ぬとはどのようなことなのか」を考えようとしました。

アメリカのベトナムへの軍事侵攻が激化するにつれて、全世界的にベトナム反戦運動が活発化しましたが、日本でも総評・社会党ブロックや共産党による反戦運動・反戦活動がありましたが、この時期の画期的な動きとして、「ベ平連」という既成の「革新勢力」から自立した、ネットワーク型の組織によるベトナム反戦運動が初めて登場したといことがあります。

高知にいた私も、高知大の学生や、高知市内の女子大の新聞会の学生、それに総評・社会党中心の「 反戦青年委員会」に対して飽き足りない思いを持つ人たちなどと一緒に、「共同行動戦線」というグループを結成し、68年5月に高知市内で初めてのベトナム反戦デモを行いました。しかし、先ほどから私が言っているその人と私が一緒に行動していると、「彼が言いたいのは、こういうことなんだよ」というように、どうしても私が彼の言葉の「解説者」のような立場になってしまい、彼との関係をどうしていくのかということが難しくなっていったということと、ある程度は高知でも運動の形ができてきたという思いもあって、68年の秋に高知を離れて富山に来ました。

大学闘争からの「問い」をどのように引き受けるのか

60年代後半は、日本全国でベトナム反戦運動が激しく展開された時期であると同時に、大学での学生運動も活発化し、全員加盟の「全学連」から本当に運動に関わりたい者の自由参加による「全共闘」方式へと学生運動のスタイルが大きく変わりました。そのような時代の雰囲気の中で、マンモス大学でそれまで学生運動をやるような学生がほとんどいないと思われてきた日大の「全共闘」の、デモなどやったということがない学生たちが初めて大学の外の大通りに出て、「 300メートル・デモ」を行うという感動的な出来事がありました。

当時の運動の渦中にいた者たちには共通して、高度成長期の微温的な日常性から自分を解放するという快感や、大学教育といった自分を日常性に縛り付けている制度からの解放感を感じていたように思います。政治党派の「決意主義」や「決戦主義」というものは見えやすいと思いますが、その当時の「行動的快

楽主義」とでも呼ぶようなものは、後の世代の人にはなかなか理解しにくいことだと思います。そのただ中に身を置いてみなければ、ただたわいないことを言っているだけのことのように聞こえるかもしれませんが、そのように、「自分が走ることで世界が変わる」といった実感や、何もしなければ自分が窒息させられてしまうような閉鎖的な壁に自分の体でぶつかることで突破することができるといった快感は、とても大きなこととしてあったように思います。

高知大にはいわゆる新左翼の人間がいなかったのですが、富山大にはいくつもの政治党派が入っていて、大学の自治会選挙の結果が報じられていたりするのを大学新聞で見て、ずいぶんと大学の雰囲気がちがうんだなと感じていましたが、全国の多くの大学と同じく、富山大学でも68年の冬に学生たちが大学本部を封鎖するということがありました。多くの場合、その始まりは大学当局がまちがって学生を処分したり、大学の会計が不明瞭であるといったささいと言えばささいな問題がきっかけでした。実際、共産党やその影響の下にある学生は、大学が民主化さえすればそんな問題は解決するんだと言っていたわけですが、それがあっという間に、「大学を解体しろ」というところまで進んでしまって、その展開のスピードの速さが一つの快感でした。

当時、学生たちの間では、「あなたにとって、～とは何か」という問いかけのスタイルが流行っていましたが、例えば、学生が大学の教官に向かって、「あなたにとって大学とは何か」とか、「あなたにとって研究とは何か」といった問いを直截に投げかけるわけです。しかし、そのような問いに対して、ほとんどの教官は、制度の上では大学というものはこうなっているといった「制度の言葉」でしか答えようとしないわけです。学生の側は、制度について聞きたいわけではなくて、「あなたという人間の実存を支えている、あなた自身の言葉で答えよ」ということを求めていたのです。しかし、そういった問いには大学側は答えようとしないために、あちこちの大学で学生たちは大学当局と大衆団交を行って何とか「制度の言葉」ではない言葉を大学関係者から引き出そうとするのですが、結局、最後までそうした問いがうけとめられることのないまま、「大学を正常化しなければならない」ということで、大学当局は学内に機動隊を導入していくことになります。

翌69年の1月に、有名な東大の安田講堂の占拠をめぐる攻防戦が３日間、繰

り広げられました。しばしば、安田講堂占拠・攻防戦が日本の学生運動のピークであるような言い方がよくされますが、実際に闘争が全国の大学にまで拡大したのは、むしろその後のことでした。安田講堂占拠・攻防戦のように、権力の弾圧に屈せずに最後まで闘い抜くという姿勢は確かにカッコいいのですが、そのような「決意主義」や「決戦主義」に対しては、違和感を感じていました。

そのように全国各地の大学が学生によって封鎖されるという状況に対して、文部省は「大学運営臨時措置法」を成立させ、学生による大学封鎖に手をこまねいているような大学には予算や補助金を削減すると脅しをかけました。結局、それによって、69年秋にはほとんど全ての大学で学生によるバリケードが解除され、大学が再開されました。

当時、大学闘争に共感するような大学の教員に対して、マスコミなどで「造反教官」などという言い方がされていました。大学闘争が鎮圧され、収束に向かおうとする中で、それらの教官たちの中には大学をやめる人たちもいましたし、その一方で、大学闘争での問題提起を受けとめて、大学に残ってがんばろうとした人たちもいました。

学生による大学批判に対しては私自身も学生と同じように考えていたし、言おうと思えばいくらでも学生よりも過激なことを言えたのですが、大学闘争というのは、所詮は学生の闘争です。それに対して、私自身としては、「大学教員闘争」はどうありえるのかという課題を大学内でやりぬこうと考えていました。実際には大したこともできなかったのですが、とにかく、機動隊に守られるような中での入試の試験監督はしないと通告しましたし、大学の教授会には出ないことにしました。また、授業中で、学生とどれだけ「対決」できるかと考えてきましたし、もう大学闘争以前の状態には「復員」はしないということを貫きたいと思ってきました。

69年11月に「佐藤訪米阻止闘争」があったのですが、各政治党派ではそれを「政治決戦」と位置づけて、大きな闘争の盛り上がりをつくり出そうとしたのですが、結局、それが、様々な政治党派や「全共闘」を含めた広い意味での「新左翼」の運動が実質をもって展開されていくことの「終わりの始まり」になりました。そのような「決意主義」や「決戦主義」によって、〈68年〉の運動の中にあったような「行動的快楽主義」というものは、逆に後退していったよう

に思います。

大学闘争が国家権力と大学当局によって鎮圧されていく状況に対して、当時、「個別学園闘争から全国政治闘争へ！」ということが盛んに主張されました。しかし、「～から・・・へ」と転換するということの重みとその文句の中味とが本当につりあっているのかという疑問がありましたし、そこに見られる「決意主義」・「決戦主義」的な発想には違和感がありました。

それに対して、私が考えていたことは、大学闘争から「全国政治闘争」へという図式ではなく、大学闘争にあたることを社会の諸領域で展開しなければならないのであって、政治闘争や国家権力との直接対峙という平面とは別に、「社会闘争」というものがあるのではないかということでした。例えば、大学でいえば学長を頂点に教授会までも含めた大学当局というものがあって、そういった「社会権力」との闘いという、政治闘争には集約されないような個々の社会的領域での運動・闘争というものがある。そのことを教えてくれたということが、私にとっての大学闘争の大きな意義でした。そうした社会運動を自立的な運動として展開できないかというのが、私の考えていたことでした。

そのような社会的領域での運動実践としては、例えば、東大の「赤レンガ」と呼ばれる一角に、精神科のインターンや若い医者が集まって患者の人たちと共に抑圧的ではない精神医療のあり方をめざそうとする動きがありました。しかし残念ながら、そうした社会的諸領域での運動というものはなかなか広がっていきませんでしたが、そういった「社会闘争」につながる「一筋の細い糸」が、70年7月7日の「華青闘」による新左翼批判だったと思います。

当時、出入国管理法が改悪されて在日外国人の政治活動を規制しようとしたのですが、それに対する反対闘争の一翼を担ったのが在日の中国系の若者たちでした。70年7月7日という日は、日中戦争の発端となった盧溝橋事件から40年にあたるということで集会が行われたのですが、「日帝打倒！」を掲げながら、在日外国人が直面しているような日本の中での日常的な差別の現実に向き合ってこなかったということを、「華青闘」のメンバーたちは、その場にいる活動家たちに向かって厳しく批判しました。日本帝国主義を本当に打倒しようとするのであれば、それを日常的に支えている差別的な社会のあり方を変えること抜きにはありえないし、それ抜きに街頭で権力と対峙する行動をいくら重ねて

も、日本帝国主義というものに抽象的にしか向き合うことができないという批判として、彼らの問題提起を言い換えてもいいでしょう。それに対して、今に至るまで日本の社会運動はきちんと答えることをしていないように思います。

私の語る〈68年〉に対して、同じ時代を共に生きてきた人たちからはぜひ、意見や批判をいただけたらと思いますし、それについて今まで何かしら聞いたことがあるという人たちには、イメージを喚起できたらと思いますが、とにかく、楽しくて面白い、心がおどるような時代でした。それは、別にただ当時を回顧したいということではなく、〈68年〉というものが今に至るまで継続しているんだということを言いたいがために、今回このような話をしてきたのだということを、最後に言いたいと思います。

今回の学習会を振り返って

今回の「アンラーニング」の学習会での埴野謙二さんの話は、次回に続くもので、まだ途中の話なのですが、その中の大事なポイントだと思うことについて少しふれてみたいと思います。

今回の学習会で語られていたような、〈68年〉の運動の中での「行動的快楽主義」や「自分が走ることで世界が変わる」といった実感は、社会保障・福祉の容赦のない削減や、法的保護剥奪の「合法化」がもたらす現在の私たちの「生きがたさ」とは、対極にあることのように思えます。しかし、ヴィルノが言う「反転された革命」としての「反革命」として現在を見ることの内に、私たちが「生きがたさ」を生きているこの時代の状況がどのようなものかを改めて捉え直し、それに反撃するための手掛かりがあるように思います。

現在、「フリーター」と呼ばれるような労働の形も、最初は、まだ日本経済が好調だった時代に、企業に束縛されることなく生きていくための「ライフスタイル」として選択したという場合が全くなかったわけではありません。しかし、今では、それはもっぱら企業が低賃金・無保障で労働力を手に入れるためのものになっているというように、人々の自由への要求を資本の「価値増殖」の源泉へと「反転」させるというのが、「反転された革命」の分かりやすい例でないかと思います。

あえて皮肉な言い方をすれば、旧来の社会秩序を覆し、それまで自らを縛り付けてきた様々な束縛や規制を突破する快感を満喫しているのは、世界の果ての果てまで、そして私たちの生きることの全てを「商品原理」・「市場原理」で覆い尽くそうとしている、グローバル化した現在の資本の側のように思います。まさにその点において、ネオリベラリズムが〈68〉年の「反革命」だと言えるのではないでしょうか。

今年は〈68年〉から40年目を迎え、当時の様々な出来事それ自体はまちがいなく過去に属することになっています。しかし、私たちが直面する「生きがたさ」として〈68年〉後の「反革命」を日々生きているという逆説的な意味でも、〈68年〉は私たちの現在と無縁ではありえません。

今回の学習会の中で話された、〈68年〉を生きていた学生たちの「行動的快楽主義」と、渋谷さんの話の中に出てきた高円寺の「素人の乱」が選挙運動という名目で高円寺駅前での連日の野外ライブ・ダンスを行って「解放空間」をつくりだしていたことや、小倉さんの話の中で紹介された、世界各地で巨大人形や仮装といった祝祭的な雰囲気の中でネオリベ／グローバリズムへの憤りや抗議を表現している抗議者たちの姿とは、互いに重なり合うものではないでしょうか。

そのような協働で生み出される楽しさの経験を、この社会の中でどのように生み出すのかということに向けて、〈68年〉の経験を改めて「活用」することが、「反転された革命」としての現在の状況を「革命」へと転換しなおすための一つのヒントとなるように思います。

アンラーニングプロジェクト07

次回案内

アンラーニングプロジェクト　第Ⅱ期
ネオリベ的遠近法を超える
――今、出来(しゅつたい)しつつあるアクション群

● ミッキーマウス！攻勢の時だ
「保障されざる者」の生・労働・運動

話し手：　平井　玄
（音楽批評・「ミッキーマウスのプロレタリア宣言」著者）
日時：　２月２４日（日）　午後１：３０～４：００
会場：　サンフォルテ３０２号室